

は、ただ過去の栄光をとどめているにすぎないという寂しさを感ぜさせる。

なお、ドミニク・ラレーを日本に紹介したのは福沢諭吉訳の「洋兵明鑑」(一八六九)が最初のもので、「バロン・レルレ、兵卒の病に罹れるを憂いて次の議論を述べ。」として陣営編の中にある衛生論を紹介している。

(慶応義塾大学・医史学研究室)

医師トーマス・B・ダンの経歴 第二報

泉 彪之助

昨年の本学会後いくつかの問題が解明され、また現地調査の際遺族との連絡に成功したのでその成果を報告する。

父ロバート・ブロディー・ダンは、一八四四年スコットランドのエジンバラに出生、エジンバラ郊外で農業に従事していた。母マーガレット・マッキー(昨年抄録のマッケイは誤り)は一八四九年スコットランドのグラスゴーに出生。二人は一八八二年六月にエジンバラで結婚し、一八八三年ごろに合衆国へ移住した。最初カリフォルニア州ベンチューラ郡ニューホールに住んだが、まもなく隣接するカミューロスへ移転、トーマス・B・ダンはこのカミューロスで生まれた。カミューロスは現在のパイルー市郊外にあるが、ベンチューラ地域の早期の開拓地の一つである。

現地調査の際、トーマス・B・ダンの出生記録がベンチューラ郡記録官事務所にないことを再確認したが、このこ

とはダン医師生前に知られており、アラメダ郡医師会にはダン医師のアメリカ市民権宣誓証明書が残されている。

ロバートとマーガレットの間には、三人の息子と一人の娘が生まれ、トーマスは次男であった。ロバートは果樹園主などの農業に従事すると共に、集落を建設し、その主な商店を所有するなどの企業家でもあった。両親は後にベンチャー郡ベンチャー市ブエナビスタ街に移転し、そこで死去している。

トーマスはパイルー市地域の小学校に通ったものと思われる。高等学校は、前回報告したようにカリフォルニア州サンタ・クルーズ高校の一九〇六年六月の卒業生名簿に掲載されていることが判明していたが、サンタ・クルーズ高校出身は前秘書のデムリング夫人によっても確認された。卒業生名簿以外の資料がない理由は、一九一三年の火災でそれ以前の資料が焼失したためであることが分かった。

カリフォルニア大学医学部出身は、同大学卒業生名簿によって確認した。卒業後カリフォルニア大学付属病院でインターンのみでなくレジデント勤務も行ったことが新しく入手した資料に記載されている。

ダン医師は最初の夫人アンに一九二七年に死別し、ドロシー夫人と一九二九年六月に再婚した。現在ドロシー夫人、四人の令嬢とも健在でニュージャージー州とニューヨークに居住している。

上海勤務中の詳細は現在家族と通信中で、今後さらに明らかになるものと思われるが、前回報告した上海市広東路三号での開業は、ドロシー夫人の記憶では比較的短期間であったとのことである。またカンントリーホスピタルは、中国名宏恩医院、旧共同租界大西路にあったカトリック系の病院であったことが判明した。

太平洋戦争勃発後ダン医師は日本軍によって拘禁されたが、その場所を海防路の収容所とした演者の推定は家族によっても確認された。収容の日時は、一九四二年十一月五日であったらしい。家族の記憶では日米交換船によるダン医師と一家の帰国は、上海出航が一九四三年十月、ニューヨーク帰着が同年十二月であったという。カリフォルニア大学医学部熱帯医学講師としての職歴は前学会でも報告したが、医学部職員名簿によれば正規の講師であって、演者の推定したような臨床講師ではなかった。デムリング夫人

によれば週一回医学部に出講していた。

ダン医師が関係していたオークランドのペラルタ、プロビデンス、サムエル・メリットの各病院は、現地に行つて見ると隣接してほとんど一箇所にあり、またパークリーのアルタ・ベイツ病院もすぐ近くであった。デムリング夫人の証言では開業医生活が主で、病院での診察は早朝に行つていた。

死去の際のフレズノへの旅行の理由について二説あったが、友人に誘われてローズボールゲームを見に行く途中であったことが判明した。

演者は次女のシルバー夫人の教示で、ダン医師の墓がパークリーに隣接するエルセリート市サンセットモズレムにあることを知り、その墓に詣でることが出来た。

前秘書デムリン夫人の証言では、ダン医師は決して冷徹な科学者型の医師でなく、患者の人格を重んずる優れた臨床家であったらしい。魯迅との間で問題となった病状あるいは病名告知の問題についても、充分慎重な人柄であったという。

(福井県立短期大学第一看護学科)

ドイツ第三帝国下における精神分析学の動向について

小俣 和 一郎

第二次世界大戦終結後すでに四〇年余を経た今日、大戦にまつわる数多くの歴史的事実は世代の交替が進む中で次第に忘れ去られつつある。このことは精神医学と精神科医療とが往時において遭遇した未曾有の歴史的危機に關してもまた同様であろう。精神科医の世代交替もまた国際的な現象であつて、ひとりわが国だけの事情では決してない。しかしながら精神科医療の歴史上最も悲惨な時代をつくり出したドイツ(西ドイツ)においては、一九八三年(ヒトラーの政權獲得後滿五十年)を境目に数多くの第三帝国關係の出版物が刊行され、過去の歴史に關する省察の氣運が生まれつつあるように見える。精神医学關係の書籍についても同様で、教科書の中にヒトラー時代の精神医学史を組み入れたもの、第三帝国下の精神分析学の歴史についての単行